



心臓よりゆく矢は、月のほうへ

母の漕ぐ自転車の後ろで、彼女の背に強くつかまりながら息子は月を見上げている。
母の若い足がどれほど自転車を進めても、夜空の月は息子を追う。息子だけを追う。
追う月は、彼をじっと見ている。その眼差しは、池に映るのと同じように、彼の心にも映し
出されてた。
空と心にと、月がふたつになった。
月がふたつになったこの事を、だれが見つけることができるだろうか。
彼自身にも月がふたつになったことは、わからない。
彼は、月がふたつ、なんて馬鹿げたことは思わない。
ただ「(私は)月だ」と思っていた。
月は「月が」と叫んでいた。
母の背に。

いずれ街の軒や木々が、息子と月とを隠してしまう。
眼差しが断たれる瞬間、空の無い夜以上の暗さが世界を満たすだろう。
だけどそんな暗さはほんの一瞬の出来事で、すぐにもとの明るさにもどるだろう。
道、家、電柱、自動販売機、商店、草むら、犬の糞、、ひとつひとつ判別のできる明るさをも
どる。
暗さの中に、明るさがともる。
暗さ。明るさ。
暗さ。

暗さが心に残っている。
明るさの内に暗さが隠れている。

彼は、いずれ、その暗さの中に母も自分も飲み込まれる事を予感する。

いずれ？
月が言わない。

予感なんて。決定的に感じ損ねている。
今まさに息子は暗さの中にいる。息子は気づきようもない。

母の疾走する自転車は息子を乗せて、その暗闇に止まっている。
道は、家に溶けて、電柱に溶けて、自動販売機に溶けて、商店に溶けて、草むらに溶けて、
犬の糞に溶けて、
全ては暗さに溶けている。

“溶けて、”のコピー&ペーストは、左から右へ、右から左へ、上から下へ、下から上へ、
右手と左手は何も掴まないままに、、溶けて、、溶けて、、溶けて、、溶けて、、溶けて、、

息子は“溶けて、”ない。それは息子に眼差しを与えない。
息子は、見る。
息子は、「ぼく!」とさけぶ。私のモノ!と叫ぶ。

月は目を閉じる。

わたしの道、わたしの家、わたしの電柱、わたしの自動販売機、わたしの商店、わたしの
草むら、わたしの犬の糞、

“わたしの”のコピー&ペーストは、左から右へ、右から左へ、上から下へ、下から上へ、
右手と左手は何も掴まないままに、、わたしの、わたしの、わたしの、わたしの、わたしの、

うるさい!
ちがう。

わたし、は目を閉じられる。

母は振り向く。

ばいばい おかあさん。



Artificial S 5 心臓よりゆく矢は月のほうへ
麥生田兵吾 *mugyuda hyogo*

2018年9月7日🌕_9月23日🌑 11:00-19:00
月曜日休廊 / 金曜日20:00まで

Gallery P A R C
GRAND MARBLE



本展フライヤーイメージ

Gallery PARC[グランマーブル ギャラリー・パルク]では、2018年9月7日(金)から9月23日(日)まで、写真家・麥生田兵吾による個展「Artificial S 5 心臓よりゆく矢は月のほうへ」を開催いたします。

麥生田兵吾(むぎゆうだ・ひょうご/1976年・大阪生まれ)は主題として「Artificial S」掲げます。この大文字の「S」は“Sense=感覚(感性)” “Subject=主体”あるいはEsは“Es=無意識”などの複数の意を持ち、「Artificial S」とは「人間の手によりつくられた、人間が獲得し得る“それらS”」として位置付けられています。また麥生田はこの「S」の探求・実験・鍛錬として、自身が撮影した写真をその日のうちにウェブサイト「pile of photographys」(<http://hyogom.com>)にアップする行為を、2010年1月より現在まで8年以上に渡って、毎日途切れることなく続けています。

麥生田は「Artificial S」を1〜5章に分類しており、これまでPARCでは連続4年に渡って各章ごとに展覧会を開催してきました。

2016年の「Artificial S 1 / 眠りは地平に落ちて地平」では、写真と写真、写真と非写真を組み合わせることで『生』を前景化させ、生と死の狭間にある「今なるもの」に触れる』に取り組みました。2014年の「Artificial S 2 / Daemon」では、目の前の漠然としたイメージ(図像)が鑑賞者の内にあるイメージ(想像)と結合し、ひとつのイメージ(意味)を形成する経験によって『わたしに内在する原初的なイメージ(=自我)の発見』を、2015年の「Artificial S 3 / 後ろから誰か(他)がやってくる」では、鑑賞者(レンズ)を見つめる無数のポートレートと、鑑賞者の眼差しの交錯に『見る / 見られる、主体と客体の発見と微かな疑い』を、2017年の「Artificial S 4 / 左手に左目 | 右目に右手」では、『私』の眼差しに交錯する主体・客体の埋没した関係性の発見』をテーマに取り組みました。そして、この一連の取り組みは、「S 1」において白(無)の世界に生じた「watashi」(生)という黒いシミは、「S 2」において「わたし」という自我(カタチ)を獲得し、「S 3」では他者の眼差し(の中にある「私」)を発見し、「S 4」では風景(世界)が「私」と「他者」の眼差しが連続・反復することで現れていることの発見、また同時に「watashi / わたし / 私」はそもそも不在なのではないかへの疑念を抱く、というベクトルとしてイメージすることができます。

本展「Artificial S 5 / 心臓よりゆく矢は月のほうへ」は「死や虚無」をテーマに持つものですが、それは社会的制度に定義される通常化された死ではなく、『私』のありかを問うことで視覚の世界に折りたたまれたものを思考し想像し、「今=死」を起こさせる』ことを目的に取り組みされるものです。

白だった世界に拡がった「watashi / わたし / 私」というシミは、だからこそカタチを持ち、いつしかそこを真っ黒に塗りつぶしました。そして今度はそこに白(死)のシミを発見する。では、この白・黒の世界で「watashi / わたし / 私」は何か? 白・黒の生じる先(生より向こう、死より向こう)は何か? この地平・構造の奥には何があるのか?

麥生田は、「S 5」において、まず「見る(私)」という主体を疑うこと』について、「目を閉じてみる」ことを写真によって促します。そして、そこに生じる「死」を通して、「私はつくられた私であって本当のわたしはもっと内に、もっと奥にあるのではないか」という「今(現在)」への疑問に触れ、またその先に「生」への希望を探し出そうとします。

5年に渡り「Artificial S」という主題に迫り、あるいはその向こうに眼差しを向ける麥生田兵吾の現在を(目を開き・目を閉じ)体験いただければ幸いです。



本展の周知・広報にご協力頂ける際に、広報用画像をご用意しております。本リリース掲載画像からご希望の画像番号および掲載媒体情報を明記の上【info@galleryparc.com】迄ご連絡ください。尚、個人の鑑賞および利用を目的とする場合は、画像の貸出しはお断りしておりますのでご了承ください。

展覧会名 Artificial S 5

心臓よりゆく矢は月のほうへ

出展作家 麥生田兵吾 mugyuda hyogo

<http://hyogom.com>

会 期 2018年9月7日[金] - 9月23日[日] 11:00~19:00 月曜日休廊 / 金曜日のみ20:00まで

料 金 無料

内 容 写真・インスタレーション

撮影した写真をその日のうちにウェブサイト「pile of photographys」(<http://hyogom.com>)にアップする行為を、2010年より現在まで8年以上に渡って、毎日途切れることなく続ける麥生田兵吾による個展。主題「Artificial S」(人間の手によりつくられた、人間が獲得し得る感性など)を掲げる麥生田は、それらを5章に分け、各章をテーマとした展覧会を2014年以降、毎年Gallery PARCで開催してきました。

その5回目となる本展では「死」や「虚無」をテーマとしながら、『私につくられた私であって本当のわたしはもっと内に、もっと奥にあるのではないか』という「生」への希望の眼差しを、およそ50点の写真とインスタレーションにより現します。

会 場 Gallery PARC[グランマーブル ギャラリー・パルク] 〒604-8165 京都府 京都市 中京区 烏帽子屋町 502 2F~4F MAP

ア ク セ ス 地下鉄烏丸線「四条」駅・阪急京都線「烏丸」駅22・24番出口より徒歩7分。地下鉄烏丸線・地下鉄東西線「烏丸御池」駅より徒歩7分。室町通・六角通 北東角 室町通側入り口より2Fへ

問い合わせ Gallery PARC (正木・村田・岡田) 〒604-8165 京都府 京都市 中京区 烏帽子屋町 502 2F~4F

TEL= 075-231-0706 FAX= 075-231-0703 MAIL= info@galleryparc.com HP= www.galleryparc.com



麥生田 兵吾 | Mugyuda Hyogo

<http://hyogom.com>

1976 大阪に生まれる

現在 大阪府在住

2010 「pile of photographys」をweb上で発表開始(現在まで継続中)

「THE TOKYO ART BOOK FAIR 2010」(3331千代田ARTS / 東京):「Zine port」の一員としてZineを出品

2011 「THE TOKYO ART BOOK FAIR 2011」(3331千代田ARTS / 東京):「Zine port」の一員としてZineを出品

グループ展 「in the waitingroom」(waitingroom / 東京)

2013 グループ展「溶ける魚 つづきの現実」(京都精華大学ギャラリーフロール / 京都、Gallery PARC / 京都)

2014 個展「Artificial S 2 / Daemon」(Gallery PARC / 京都)

グループ展 「2014 FOIL AWARD in KYOTO」(FOIL GALLERY / 京都)

キャンノン写真新世紀2014 佳作受賞 清水稷選

2015 個展「Artificial S 3 / Someone (Another one) comes from behind. “後ろから誰か(他の)がやってくる”」(Gallery PARC / 京都)

2016 個展「Artificial S 1 “眠りは地平に落ちて地平”」(Gallery PARC / 京都)

2016 グループ展「Emerging KG+ 2016 supported by LUMIX x YellowKorner」(ロームシアター京都 / 京都)

2016 グループ展「showcase #5 “偶然を拾う- Serendipity”」(eN arts / 京都)

2016 グループ展(企画)「scene | space」(STUDIO MONAKA / 京都)

2017 グループ展「showcase #番外:スナップショット、それぞれの日々」(galleryMain / 京都)

2017 個展「Artificial S 4 / 左手に左目 | 右目に右手」(Gallery PARC / 京都)

2017 グループ展「HAPPY SPOT FUTURE」(奈良県文化会館 / 奈良)

2018 グループ展「アーカイブをアーカイブする」(みずのき美術館 / 京都)

主な出版

2014 雑誌「FOIL vol.4(2014) FOIL AWARD in KYOTO」に作品掲載